

■ PCN だより**PCN Volume 66, Number 5 の紹介**

2012 年 8 月発行の *Psychiatry and Clinical Neurosciences* (PCN) Vol.66 No.5 には、Review Article が 1 本、Regular Article が 9 本、Short Communication が 3 本掲載されている。今回はこの中から外国から投稿された 5 本の内容と、日本国内からの論文については、著者において日本語抄録をいただき紹介する。

(外国からの投稿)**Review Article**

1. Treating patients with schizophrenia deficit with erythropoietin ?

G. Fond, A. Macgregor, J. Attal, A. Larue, M. Brittner, D. Ducasse and D. Capdevielle

Adult Academic Psychiatry Department, La Colombiere Hospital/CHRU of Montpellier, Montpellier, France

エリスロポエチンを使って統合失調症を治療する

このレビューでは、エリスロポエチン (EPO) の統合失調症に対する効果、およびこの疾患における EPO の使用の可能性を説明する病態生理学的なメカニズムに関する研究を要約し、評価した。EPO は、主にエリスロサイトの合成を調節する作用をもつことで知られ、慢性貧血の治療剤としてしばしば使われる。しかし、このサイトカインは、精神疾患の症状を改善することを含んだ他の多くの特性をもつ。このレビューは、体系的な総説およびメタアナリシス (PRISMA) によるガイドラインにおいてよく使用される用語を使うことによって行われた。Medline, Web of Science, そして、Cochrane の 3 つのデータベースにおいて、「エリスロポエチンと精神障害または統合失調症」という探索用語により、検討

が行われた。78 個の研究が集められ、定性的な統合所見が作成された。メタアナリシス的なアプローチは行わなかった。EPO が脳に対して有する潜在的ないくつかの特性、すなわち、神経伝達物質の調節作用、神経保護作用、炎症過程の調整、脳血液関門の透過性への影響、酸化ストレスと神経新生への効果などが、統合失調症の治療に関連することが示唆された。しかし、EPO による治療には、脳血栓、癌、脳虚血へとつながる脳代謝と平均動脈圧の亢進のリスクの増加などのいくつかの有害な副作用がある可能性が示唆され、このことが、EPO の使用を著しく制限するであろうと思われた。結局、今回のデータから結論を導くことは困難であったが、このフィールドにおけるさらなる研究が要請されていると考えられた。

Regular Articles

1. Determinants of psychogeriatric inpatient length of stay and direct medical costs: A 6-year longitudinal study using a national database in Taiwan

C-M. Liu, C-S. Li, C-C. Liu and C-C. Tu
Department of International Business, Asia University, Taichung, Taiwan

老年期精神障害患者の入院期間と直接的医療コストの決定要因：台湾の国内データベースを使った 6 年間の縦断研究

【目的】この研究では、2002 年に精神病床に初回入院した 65 歳以上の老年期精神障害患者 2,291 例における平均入院期間 (length of hospital stay: LOS) と平均直接的医療コスト (direct medical costs: DMC) に関連する要因が調査された。【方法】これ

らの例における入院に関するデータが、入院後6年間(2002~2007年)にわたって、台湾国立健康保険プログラムのデータセットに基づいて追跡された。解析は、t-test, χ^2 -testとzero truncated Tobit regressionを用いて行われた。【結果】LOSとDMCの平均値は、性、診断、施設のタイプ、公的施設か私的施設か、入院回数によって、有意に異なっていた。年齢とは関連がなかった。LOSとDMCの両者が、入院回数に関して、凸型の逆U字カーブを描いた。男性であること、認知症に比較して統合失調症・妄想性障害であること、私立病院に比較して公立病院である場合に、LOSが有意に長く、DMCが高かった。認知症に比較して、器質性精神病と不安障害の場合にはLOSが有意に短く、また感情障害ではLOSが有意に短かったがDMCは高価であった。総合病院に比較して、地域共同体と精神病院への入所・入院では、LOSが長かったがDMCに差はなかった。【結論】今回の研究の結果は、入院治療の提供者や政策決定機関にとって、精神科治療の効率を改善し、老年期精神障害入院例に対する国立健康保険財務改革を実行するための参考資料として有用と思われる。

2. Dimensional analysis of burden in family caregivers of patients with obsessive-compulsive disorder

A. R. Torres, N. T. Hoff, C. R. Padovani and A. T. de A. Ramos-Cerqueira

Department of Neurology, Psychology and Psychiatry, Botucatu Medical School, Botucatu (SP), Brazil

強迫性障害患者の家族の介護負担ディメンションの分析

【目的】強迫性障害は、その患者の家族に感情的負担を引き起こすが、その負担の特定のディメンションを検討した研究はない。本研究の目的は、強迫性障害例の家族において、Zarit Burden Interview (ZBI) の各ディメンションを評価し、これと介護者内要因との関連を検討することである。【方法】47人の患者とその家族が、社会経済的地位についての質問紙、ZBI, the Self Reporting Questionnaire, the

Family Accommodation Scale, the Yale-Brown Obsessive-Compulsive Scale を使った横断研究に参加した。ZBIの因子分析は、バリマックス回転を用いて行われた。【結果】全体の分散の74.2%を説明できる6つの因子が抽出された。すなわち、要因1は、介護者の私生活に対する干渉(分散の36.6%を説明)、要因2は、患者の依存に対する困窮(同10.8%)、要因3は、介護者の耐え難いイライラ感(同9.2%を説明)、要因4は、罪悪感(同7.2%)、要因5は、介護者が感じる危険(同5.6%)、要因6は、介護者の困惑と狼狽(同4.8%)である。この6要因は、強迫性障害の重症度および介護者の対応の大きさと相関し、要因1, 2, 5, 6は介護者の精神的に病的な状態と相関していた。介護者が女性の場合、要因5と6との関連が、介護者が親や息子・娘である場合には要因5と、教育歴が高い場合には要因6と、同居の場合には要因3と、健康状態が不良という自己評価とは要因1, 5, 6と、介護者が無職の場合には要因1, 2, 5, 6と関連していた。【結論】今回同定された心理的負荷のディメンションは、介護者の生活の中で最も影響を受けやすい側面であり、今後、より特定の介入計画の立案に有用と思われる。この結果として、介護者は、強迫性障害例の治療により有効に参加することができ、また疾患が介護者自身の生活へ与える影響をより少なくすることができると思われる。

3. Associations between hypothalamic-pituitary-adrenal axis function and facial emotion processing in depressed and control participants

K. M. Douglas and R. J. Porter

Department of Psychological Medicine, University of Otago, Christchurch, New Zealand

うつ病における視床下部-下垂体-副腎系と表情処理の正確さとの関係

【目的】本研究では、64人の大うつ病入院例と49人の健常例において、2週間の間の視床下部-下垂体-副腎系の機能の一側面と表情処理の正確さとの関連が検討された。【方法】デキサメサゾン抑制試験と表情認知検査が、ベースライン時およびその後10~14日において検査された。うつ病の治療効果は、ペー

スライン時の6週間後におけるMontgomery-Åsberg Depression Rating Scale の得点の変化で決められた。【結果】全サンプルにおいて、デキサメサゾンへのコルチゾールの反応の増加は、怒り、悲しみ、嫌悪表情の認知能力の低下と有意に相関していた。しかし、この相関は、ベースライン後10~14日においては有意ではなかった。意外なことに、デキサメサゾンへのコルチゾール反応は、うつ病急性期例と健常例で同様であり、治療への反応という点においても継続的に変化しなかった。【結論】予備的な結果ではあるが、視床下部-下垂体-副腎系の機能と脅威関連の陰性表情の処理能力は、おそらく扁桃体の機能を介して関連を持つことが示唆された。

Short Communication

1. Platelet count alterations associated with escitalopram, venlafaxine and bupropion in depressive patients

H. R. Song, Y-E. Jung, H-R. Wang, Y. S. Woo, T-Y. Jun and W-M. Bahk

Department of Psychiatry, Yeouido St Mary's Hospital, College of Medicine, Catholic University of Korea, Seoul, Korea

うつ病例におけるエシタロプラム、ヴァンラファキシン、ブプロピオンによる血小板数の変化

本研究の目的は、3種類の抗うつ剤において、血小板数の変化を検討することである。未服薬状態におけるすべてのケース（131例）がうつ病と診断され、エシタロプラム（42例）、ヴァンラファキシン（50例）、ブプロピオン（39例）が処方され、服薬前と治療後1ヵ月において血小板数が測定・比較された。エシタロプラムの服用により、血小板数が有意に低下したが、他の2剤では有意ではなかった。これらの所見は、エシタロプラムが血小板数の低下と関連を持ち、ブプロピオンは血小板数に影響を与える可能性が低いことを示唆している。

（文責：加藤元一郎 PCN 編集委員）

（日本国内からの投稿）

Regular Articles

1. Preliminary outcome study on assertive community treatment in Japan

M. Nishio, J. Ito, I. Oshima, Y. Suzuki, K. Horiuchi, T. Sono, H. Fukaya, F. Hisanaga and K. Tsukada

日本におけるACTの援助効果に関する予備的研究

入院中心から地域生活中心へと推し進められている日本の精神保健分野でも、諸外国で高い評価を受けているACTの援助効果を実証的に検討する必要がある。本研究では国立精神・神経センターにおけるACTプログラムのパイロット段階での援助効果を報告する。国府台病院精神科に平成15年5月から平成16年4月までの期間に入院し、年齢、診断、居住地、精神医療サービス利用状況、社会適応、日常生活機能などに関して独自に作成した加入基準によって重症の精神障害を抱えていると判断された者のうち、研究参加について同意が得られ、退院1年後の追跡調査が可能であった41名を対象とした。入院前1年間と退院後1年間の精神科入院日数・回数、精神科救急受診回数の平均を比較すると、入院日数・回数に関しては有意な減少が認められた。ベースラインと退院1年後の比較では、QOL生活全般満足度とBPRS総点に変化はなかったが、GAF得点の増加と、抗精神病薬CP換算値の減少が有意に認められた。本研究は方法論上、結論に一定の限界を伴うが、ACTによる支援によって病状や社会生活機能・生活の質を落とさずに、重い精神障害をもつ人たちが地域で暮らす期間が長くなる可能性が示唆されたと考えられる。

2. Sex differences in risk factors for suicidality among Japanese substance use disorder patients: Association with age, types of abused substances, and depression

T. Matsumoto, S. Matsushita, K. Okudaira, N. Naruse, T. Cho, T. Muto, T. Ashizawa, K. Konuma, N. Morita and A. Ino

わが国の物質使用障害患者における自殺リスクの性差：年齢、乱用物質、うつ状態との関連に注目して

【目的】わが国の物質使用障害患者における自殺の危険因子を、年齢と性別を調整した形で明らかにするとともに、さらに自殺の危険因子に関する性差を検討する。【方法】2009年12月の1ヵ月間に国内7ヵ所の依存症専門医療機関外来に受診した物質使用障害患者1,420名を対象として、年齢、乱用物質の種類、現在のうつ状態(K10)、ならびに現在の自殺リスク(M.I.N.Iの自殺傾向の項目を採用)に関する自記式質問紙を実施し、自殺傾向に関連する要因を男女別に多変量解析によって明らかにした。【結果】多変量解析の結果、物質使用障害患者全体では、現在の高度な自殺傾向に関連する要因として、若年であること、女性であること、現在うつ状態にあることが同定された。男女別の解析では、男性患者では若年であることと現在うつ状態にあることが、女性患者では、現在うつ状態にあることだけが、高度な自殺傾向に関連する要因として同定された。【結論】すでに海外の研究でも指摘されているように、現在うつ状態にあることは物質使用障害患者の自殺リスクを予測する要因として重要である。一般に若年の物質使用障害患者は衝動的で自殺リスクが高いが、女性の場合には、どの年代でも自殺リスクが高いと考えて対応する必要がある。

3. Secluded/restrained patients' perceptions of their treatment: Validity and reliability of a new questionnaire

T. Noda, N. Sugiyama, H. Ito, P. Soiminen, H. Putkonen, E. Sailas and G. Joffe

隔離・身体拘束を受けた患者の治療認識調査票の信頼性・妥当性について

【目的】隔離・身体拘束を受けた患者の治療全体への認識を評価できる質問票の開発を行った。【方法】専門家による内的妥当性の検討を経て選ばれた、治療への認識に関する17項目の自記式質問票(64 Secluded/Restrained Patients' Perception of their Treatment: SR-PPT)を、隔離・身体拘束を経験した56名の患者に実施し、患者満足度質問票(Client Satisfaction Questionnaire-8: CSQ-8J)との併存妥当性を検討した。加えて、SR-PPTに回答することへの負担感の評価を行った。【結果】因子分析の結果、「スタッフとの協働」(9項目)と「隔離・身体拘束への認識」(2項目)の2因子が抽出され、クローンバックの α 係数はそれぞれ0.928、および0.887、CSQ-8Jとの相関係数は0.838、および0.609であった。またSR-PPTに回答することへの負担感は小さかった。【まとめ】11項目からなるSR-PPTの内的妥当性、併存妥当性は十分であった。SR-PPTを用いることによって、患者の視点から隔離・身体拘束を含む治療全体について評価できることが可能となる。

4. Effects of antipsychotic polypharmacy on side-effects and concurrent use of medications in schizophrenic outpatients

Y. Hashimoto, J. Uno, T. Miwa, M. Kurihara, H. Tanifuji and M. Tensho

外来統合失調症患者における副作用および併用薬に及ぼす抗精神病薬多剤投与の影響

【目的】薬物療法は統合失調症治療の1つであるにもかかわらず、半数以上の患者が服薬ノンアドヒアランスとなる。これまでの報告では、服薬ノンアドヒアランスの評価は医療スタッフだけで行われてきた。しかし我々は、患者が薬を飲まないのは何か理由があるのではないかと考えた。そこで本研究では、

患者が薬を飲まない主観的な意見を調査した。また、副作用および併用薬に及ぼす抗精神病薬多剤投与の影響について検討した。【方法】252名の外来患者を対象に自記式のアンケート調査（薬に対する構え、副作用の有無と種類について）を精神科病院で行った。登録患者を処方されている抗精神病薬の数により、単剤群と多剤群に分け、抗精神病薬の投与量、併用薬、副作用の数について後方視的解析を行った。【結果】抗精神病薬の単剤群と多剤群の間において、薬に対する構えに影響は見られなかった。薬を飲まない理由として最も多かった内容は「時々飲み忘れてしまう」であり、次いで副作用であった。副作用のうち体重増加が最多であったが、抗精神病薬の数の影響は見られなかった。しかしながら、口渴（ $P < 0.05$ ）と性機能障害（ $P < 0.01$ ）は単剤群に比べて多剤群で有意に高い頻度であった。また抗精神病薬の投与量、抗パーキンソン病薬の併用率および副作用の数も多剤群は単剤群に比べて有意に高値を示した（すべて $P < 0.01$ ）。【結論】本研究において、統合失調症患者は抗精神病薬の多剤投与群で高頻度の副作用が生じていたが、薬に対しては良い印象を持っていた。単剤群では多剤群よりも副作用の発現や併用薬の数は有意に少なかったことを考慮すると、抗精神病薬単剤で治療することは、患者が不快と感じる副作用を軽減させ、服薬ノンアドヒアランスの低下を防止する可能性が示唆された。

5. Treatment of delirium with risperidone in cancer patients

Y. Kishi, M. Kato, T. Okuyama and S. Thurber

がん患者のせん妄に対するリスペリドンの効果

【目的】せん妄治療に抗精神病薬が使用されることが多い。本研究では、がん患者のせん妄に対するリスペリドンの有効性を、基礎にある身体疾患重症度の変化を考慮に入れて検討した。【方法】せん妄を発症し、精神科コンサルテーションのあった29症例のがん患者（平均年齢 68.9 ± 12.5 歳、男性 69%）を対象とした。リスペリドンの1日1回経口投与（平均投与量 1.4 ± 1.3 mg/日）を行った。対象者は、試験開始前と終了時（7日目）に、標準化された定量的な尺度を用いて、認知機能、せん妄、ならびに身体

重症度を評価した。【結果】せん妄患者に対して、通常の臨床マネジメントに加えてリスペリドンを投与することの有効性が示された。治療反応率 48%、寛解率 38%であった。せん妄重症度は79%の患者で減少していた。せん妄重症度の改善は、年齢、性別、認知機能障害ならびに身体疾患重症度とは独立して認められた。また、興奮や知覚障害だけでなく、その他の症状の改善も認められた。【結論】進行がん患者のせん妄に対して、通常の臨床マネジメントに加えてのリスペリドン投与は、せん妄治療に有効であった。リスペリドンによるせん妄の改善は、身体疾患重症度の変化とは独立して認められた。

6. Clinical evaluation of percutaneous endoscopic gastrostomy tube feeding in Japanese patients with dementia

R. Kumagai, M. Kubokura, A. Sano, M. Shinomiya, S. Ohta, Y. Ishibiki, K. Narumi, M. Aiba and Y. Ichimiya

認知症患者に対し行われた経皮内視鏡的胃瘻造設術による経管栄養法の臨床的評価

【目的】高齢認知症患者に対する経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）による経管栄養法の臨床的評価を行うことを目的とした。【方法】順天堂東京江東高齢者医療センターでPEGを施行された認知症患者群155名に対し、認知症の診断名、入院前後の生活環境、生存率、PEG施行前および施行後6ヵ月後のアルブミン値、誤嚥性肺炎（AP）の発症の有無を調査した。生存率、アルブミン値、APの有無については経鼻経管栄養が施行された認知症患者群106名と比較した。【結果】診断名はアルツハイマー型認知症と血管性認知症が多くを占めていた。53%の患者は自宅からの入院だったが、自宅退院となった患者は21.2%に減少していた。アルブミン値の平均値（SD）は、PEG施行前は $2.9 (0.4)$ g/dL、施行半年後は $2.9 (0.6)$ g/dLだった。PEG施行前にAPを呈していた患者のうち、51.6%は施行後に再発を認めた。一方で、施行前にAPを認めなかった患者のうち、9.4%には施行後にAPの発症を認めた。PEGが施行された患者群では、27ヵ月にわたり経鼻経管栄養が行われた患者群よりも高い生存率が示された。【考察】認知症患

者に対する PEG は、維持療法として機能していた。経鼻経管栄養に比べ、嚥下機能の障害を誘導しないこと、2年間高い生存率を示すことが認められた。しかし、在宅医療の促進には関与していないことがうかがわれた。

Short Communication

1. Early psychological distress among sufferers after the 2011 Northern Nagano Prefecture Earthquake

M. Shindo, H. Kitamura, A. Tachibana, H. Honma and T. Someya

2011年長野県北部地震被災者の心理的苦痛

長野県北部地震は2011年3月12日、東北地方太

平洋沖地震の翌日に発生し、中山間地である新潟県津南町では震度6弱を記録した。長野県北部地震被災者の心理的苦痛を把握するため、津南町の住民3,078人に対し戸別訪問調査したところ、対照地区と比べ津南では何らかの自覚症状、および不眠を訴える住民が多かった。自覚症状の内訳は地震への恐怖や不安関連症状が42.7%と最多であった。また、女性および高齢者はそうでない被災者と比べ心理的苦痛を訴える比率が高かった。長野県北部地震により、不安や不眠を訴える津南町住民が増えたと推測され、特に女性・高齢者については注意深く経過観察すべきである。

(精神神経学雑誌編集委員会)